

2011年
6月10日

女のしんぶん

は私・女の目・文壇

子どもを被ばくを放置するな

今も続く学校の放射能汚染

福島第一原発4基が一度に大事故を起こすという史上類を見ない惨事が起きてから2カ月以上が過ぎた。事態は収束どころかいつ終わることも知れない泥沼状態である上に、余震がいつ来るかも知れず、その場合に何が起きるのか予測不能である。1,3,4号基で水素爆発が起き、建屋は見る影もなく破壊された上に、原子炉はみなどこかに穴が開いて、ひたすら冷やさしか方法がない核燃料にいくら水をかけても漏れてゆく。

チェルノブイリ以上の汚染？

5月6日に文科省と采国エネルギー省によるモニタリング結果が発表された。恐るべきことに、原発から北西方向に広がる最も強く汚染された地域は、セ

シウム137の濃度が平方メートルあたりチェルノブイリ事故後の強制避難区域の下限よりも高い汚染値を示している。空間線量率は19 μ Sv/時(マイクロシーベルト/時)となり、90 μ Sv/時(マイクロシーベルト/時)ととなり、年間に換算すると167 μ Sv/年(マイクロシーベルト/年)から796 μ Sv/年(マイクロシーベルト/年)となる。人口30万人近くの福島市にも汚染は広がり、空間線量率は1.9 μ Sv/時(マイクロシーベルト/時)以上(0.6 μ Sv/時)以上の汚染となった。

この無策さと人権無視に我慢できなくなった福島県の親たちが厚生労働省、文科省、原子力安全委員会に対し20 μ Sv/時(マイクロシーベルト/時)の撤回を求めた。どのように抗議しても、当局

側の答えはいつも判で押し印のように同じだ。「子どもを放射線管理区域で遊ばせてはいけない。しかし校庭で遊ばせることは差し支えない」「これから線量を測る」「校庭の土を除去する作業にブレーキはかけない」。除染はする必要はない。子を思う親たちの悲痛な叫びに耳を傾けるでもなく、心を動かされている様子もない。

これは100 μ Sv/時(マイクロシーベルト/時)程度の被ばくで0.55%のガン死亡が増えることも大したことではないという意味だろう。すると、20 μ Sv/時(マイクロシーベルト/時)が安全と言った委員はいなかったということと全く矛盾するではないか。

「放射線管理区域」というのは、その中で飲食・喫煙はもちろんできないし、入る時には履き物を換え、出る時にはカウンスターで汚染の有無を調べなければならぬ。18歳未満の労働も禁じられている。このような所に、子どもを置いておいて良いはずはない。

責任はだれが取るのか
このような重大事故を引き起こしたからには、大臣をはじめ担当者には当然その政策の失敗の責任をとって辞めるべきではないだろうか。彼らはなおその場に居座って、自らの失敗のつけを子どもたちの健康で支払わせようとしている。この構図は一日も早く改めなければならぬ。

0.55%の死亡率の増加は大変な問題である。しかも、この増加分は誰が担うかという点、放射線に感受性の高い胎児、幼児、子どもたちだ。

人権無視する文科省

しかし、文科省は4月19日、福島県内の学校などの年間20 μ Sv/時(マイクロシーベルト/時)を暫定基準値として決めた。この基準以内に取り除けるために生徒や子どもの野外活動の時間を短縮させる方針だ。除染を行うとか、学童を疎開させるとか、何らかの対策を立てるのではなく、単に子どもたちを家の中に閉じ込めることで被ばく量を下げようとする。

このような大問題を平気で言える危険人物をいつまでも原子力安全委員にしておくべきではないし、20 μ Sv/時(マイクロシーベルト/時)を幼児や学童に押しつける文科省にも、原子力行政失敗の責任をとりさるべきだ。(5月23日記)

■崎山比早子(なみやまひさこ) 高木学校、元放射線医学総合研究所主任研究官、医学博士



5月23日、福島の親たち70人、支援者500人が文科省に集結。渡辺格文科省科学技術・学術政策局長は「20ミリシーベルト撤回」を即座に求める親たちに対してあいまいな回答を繰り返し、保護者と支援者の怒号が飛び交った(2面に関連記事)